Osaka University of Economics Working Paper Series
No. 2017-1

北朝鮮における体制批判者の状態と意味世界

大阪経済大学　経済学部
黒坂　真

2017 年 5 月

北朝鮮における体制批判者の状態と意味世界

黒坂　真

要旨

本稿の課題は北朝鮮の最貧困層である体制批判者の状態が、どのような仕組みで決定されているかについて北朝鮮当局公表資料と、元住民の手記を用いて検討することである。北朝鮮では体制批判者、「敵対分子」は処刑ないしは政治犯収容所や山間僻地に連行される。これは「敵対分子」が自主性を失った人間だから動物と変わらず、彼らを動物のように扱うことこそ首領様の信任に応えることだという意味世界を、朝鮮労働党幹部が心中に保持しているからである。北朝鮮の住民は体制を批判すると過酷に扱われることを前提にして、言動を決定している。

キーワード

北朝鮮　当局公表資料　最貧困層　意味世界　自主性

はじめに

張成澤という男がいた。金正日の義弟として、権勢をふるった人物である。張成澤は「反党反革命宗派分子」というレッテルを貼られ、2013 年 12 月に処刑された。北朝鮮では体制批判者を処刑ないしは政治犯収容所や山間僻地に連行する。処刑された人の所得はゼロである。政治犯収容所で「政治犯」とされた人とその家族は、食料として僅かなトウモロコシ等を与えられる程度で長時間の過酷な労働をさせられる。北朝鮮の住民は体制批判者が過酷に扱われることを承知しており、それを前提として、自分の経済状態をより良いものとするために日々の言動を決定すると考えられる。

一般に、ある社会の現状と今後を分析する際、その社会の最貧困層ないしは最富裕層が、どのようにして形成されているのかを考えるべきである。人は何かの理由により、所属する社会での最貧困層になりうる。その理由、仕組みと最貧困層はどんな暮らしをしているかを検討していくと、最貧困層から見たその社会の全体像が把握できるだろう。欧米、日本や韓国のような資本主義の経済社会では、ある人が路上生活者あるいは犯罪者[1]にどのような経路でなってい

[1] 犯罪者とは、その社会の法を犯し「正統派」「多数派」とは異なる生き方を選択し、しばしば「裏社会」を構成している人々である。「裏社会」を検討すれば、「表社会」、「正統派」「多数派」とは何であるかが見えてくる。この手法は「遍歴民」や「海の民」から日本史

くのか、そして彼らが構成する小社会の実態を調べれば、「裏社会」の合わせ鏡として「表社会」が把握でき、社会の全体像が徐々に明らかになる。
北朝鮮の住民は当局により政治犯収容所に連行され過酷な労働と栄養失調から死亡するか、処刑されて死亡するかもしれないという恐怖の制約に直面している。処刑される人、政治犯収容所へ連行される人は北朝鮮社会における最貧困層である。生きとし生けるものは死にたくない。最貧困層にはなりたくない。殆どの人々は最貧困層にならないように身を処しているであろう。

それでは北朝鮮の最貧困層である体制批判者は、どのように形成されるのか。彼らの状態は、どのような仕組みで決定されているのだろうか。本稿は北朝鮮当局公表資料と北朝鮮社会及び在日本朝鮮人総連合会関係者が構成する小社会の体験者の手記を用いてこれを検討する。[2]
1 で、本論の分析手法と、関連するこれまでの研究成果について説明する。2 で、金日成の自主性論と、金正日の「社会的政治的生命体」論について説明する。金正日は北朝鮮社会を社会的政治的生命体のように動かそうとしていた。金正日の社会的政治的生命体論と金日成の自主性論を結合すると、金日成、金正日の「教示」「お言葉」通りに行動する人間が最も自主的な人間であり、自主的な民族であることになる。金日成の「教示」、金正日の「お言葉」、近年では金正恩の命令実行を外国が妨げるなら、「共和国の自主権」を侵害していることになる。3 で、北朝鮮の憲法、刑法について説明する。4 で北朝鮮当局が体制批判者をどのように把握し、扱ってきたかを説明する。5 で北朝鮮社会ないしは在日本朝鮮人総連合会関係者が形成する小社会の体験者の手記を紹介し、体制批判者がどのような状況に追い込まれていったかを確認する。6 で朝鮮労働党と在日本朝鮮人総連合会幹部が心中に保持している意味世界を考える。7 で本稿を要約し、北朝鮮当局公表資料利用のあり方及び北朝鮮の企業管理システムの分析手法について問題提起をする。

1・本論の分析手法について

マクロ経済学では、労働者の所得水準は通常、実質賃金×雇用量で表される。実質賃金と雇用量は財市場や労働市場、あるいはそれらと資産市場の需給がそれぞれ一致するように調整され、決定されるとみなす。しかし政治犯収容所や山間僻地では、普通の労働市場が存在するとは考えにくい。そこに連行された

を語った網野史観にヒントを得ている。網野（2014）参照。昭和恐慌時の最貧困層については、内橋（1992）が詳しい。
[2]本稿は「北朝鮮の分析に際し、北朝鮮当局公表資料を利用すべきだ」旨の文(2013)(2014)の問題提起に対する、黒坂(2015-1)(2015-2)に続く答えである。独裁体制下での当局作成の非公表資料による研究には、例えば Gregory(2001)がある。

人々はいわば奴隷のような境遇にあるからだ。奴隷の場合、雇用は一定と考えられる。奴隷が自分で決定できる変数は、労働努力であろう。Williams（1968、第一章）によれば奴隷労働は強制を必要とし、非熟練労働で融通がきかない。砂糖、煙草、綿花のような作物の栽培においては、要求される技能が単純で型にはまっているので、奴隷労働を利用することが有利になる。北朝鮮の政治犯収容所でも、囚人が比較的単純な労働に従事させられている可能性がある。18号管理所という政治犯収容所に 2 年弱収容された康明道氏は、砂利の採取、農作業や石炭堀りなどをさせられたと述懐している（康（1998)、第 7 章)。奴隷の主人は、奴隷の行動を見て自分の利益を最大にするように労働努力の実質賃金を決定すると考えることができる。これを表現する経済モデルとしては例えば、Bowles and Gintis の「抗争交換モデル」がある。

奴隷と主人の関係が、奴隷の経済状態の決定要因にどのような影響を与えるかという問題も重要だが、そもそもなぜ人が奴隷にされてしまうのかという問題をまず検討せねばならない。欧米諸国はかつて、アフリカの黒人をつかまえて奴隷として売却した。奴隷の売買で、双方が利益を得たから奴隷貿易は長期間存続したと考えられる。しかし北朝鮮社会では、体制批判者は政治犯収容所を管理している国家安全保衛部に売却されているわけではない。体制批判者を政治犯収容所や山間僻地に連行するのは国家安全保衛部などの治安警察であるが、体制批判者をそのように扱うという行動が北朝鮮社会で長年継続していることをどのように解釈すべきなのだろうか。これは、制度の一つになっていると考えられる。黒坂（2015-2）は「反党反革命宗派分子」という語と、金日成、金正日の著作や北朝鮮の刑法との関係について論じた。本稿は、北朝鮮の他の公表資料と北朝鮮社会の体験者の手記を読み込んでこの問題を考える。それでは制度とは何か。これは社会学の大問題である。本稿ではこれを、盛山（1995）（2011）が提起している意味論の立場から検討する。

人は、言葉により社会と、社会の中での自分の位置、役割を把握する。その社会の中で頻繁に用いられている言葉を、人々がどのような意味で受け止めているかを検討ことにより、社会の実態が徐々に見えてくると考えられる。本論は、盛山(2011)のように社会が人々の意味世界において、成り立っているという見方をとる。盛山(2011,p23)によれば「意味世界」とは人の主観的世界が意味に充ち満ちていることである。世界がどうなっているか、なぜ世界はこのようになっているのか、何に価値があるか、どのように生きるべきか。誰でもこれらを問いかけ、部分的に答えを見出して生きている。そうした問いと答えから成るのが意味世界である。現行の社会システムを維持したいのなら、人々の意味世界を現行のままでとどめておかねばならない。盛山（1995、 p 221）は、制度は理念的な実在であり、意味及び意味づけの体系であると述べている。盛

山（1995, p 247）によれば、制度を行為パターンとみなすのなら、制度の成立にとって何らかの意味での人々の共同主観性が必要だという推論が生じない。本稿は北朝鮮当局公表資料を読み解くことにより、公表資料に頻出する言葉から北朝鮮社会に生きる人々が保持している意味世界を探求する。

北朝鮮では、テレビ、ラジオ、新聞と雑誌などすべての公刊物は当局、朝鮮労働党の監視下にある。これは人々が抱く意味世界を、独裁者側にとって都合が良いようなものにする狙いがあるからだ。そこで我々が北朝鮮当局公表資料で頻繁に用いられている言葉と表現に着目すれば、北朝鮮の人々の意味世界が徐々に把握でき、人々の定型化された行動方式が明らかになる。意味世界は人々の心の中にあるから、実証できにくい。想像、憶測の域を出ないのではないかという疑問が直ちに生じる。しかし人は言葉を用いて世界を把握し、心中に物語を描いて行動する生き物であるから、意味世界の解釈は人の生きざまについての解釈でもある。

内藤（1999）は毛沢東の肖像が出ている切手の分析を通じて、「現代中国」を歴史的に再構成している。内藤によれば、切手に描かれる元首ないしは「建国の父」の肖像には各時代の政治的・社会的状況が如実に反映される・平時には背広姿で描かれていた元首が、戦時には軍服姿になる。切手の発行者である国家が、元首のイメージ操作を行っていることの反映である。切手を通して、為政者が心中に描いているあるべき世界像を読み取るという内藤の手法「郵便学」は、意味論の手法でもある。

佐藤（1978）、玉城（1996）も意味論の手法で、北朝鮮社会を分析している。玉城（1996）掲載論考「チュチェ思想の登場」は、主体思想が全国民を金日成、金正日の奴隷化させる内容になっていることを、北朝鮮当局公表の公表資料を読み解いて指摘している。佐藤（1978）の「Ⅱ　共和国をみる目」の「2　『主体思想』と官僚主義」は、小田実氏の「私と朝鮮」が北朝鮮の主体思想に対する率直な批判であることを認めつつも、北朝鮮社会でどのような人間関係が作り出されているかについて関心を払っていないと批判している。佐藤（1978）は北朝鮮当局の公表資料により、北朝鮮では批判の自由が存在しえないこと、金日成への個人崇拝批判は「全社会をチュチェ化する」ことへの「反逆」になり、「反革命分子」と断定されると述べている。佐藤（1978, pp. 180-181）は、1974 年頃から北朝鮮当局の出版物が金日成の家計がいかに革命家の家系であるかというキャンペーンを始めたことを指摘している。佐藤（1978）は、このキャンペーンが後継者問題とからんでなされたものかどうかの確証はないと述べているが、今日ではこの頃、金正日が後継者としての地位を確立したことが明らかになっている。

北朝鮮では、人々の消費は独裁者、北朝鮮当局が決定する配給と、独裁者、

北朝鮮当局と人々との様々な交渉により与えられる「贈り物」や特別物資、および闇市場での取引に依拠している。「贈り物」や特別の物資が殆ど与えられない下層の人々は、僅かな配給と闇市場での取引に依拠して生活せざるを得ない。従って独裁体制により最底辺の人々が形成され、飢餓水準の消費をしていると考えられる。玉城（1996, pp201-203）は北朝鮮の経済を、第一経済（表面に現れる経済計画や国家予算の部分で、政務院が主管する）、第二経済（軍事経済部門）と第三経済（金日成、金正日に直属する部分で、「39 号室」という機関が運営）に分けて説明している。次に、金日成と金正日の著作から「自主性」について検討する。

2・金日成の自主権論と金正日の「社会的政治的生命論」論

在日本朝鮮人総連合会（1995、p56）によれば金正日は 1974 年 4 月 14 日に、金日成の　偉大さと不滅の業績を全面的に明らかにし、全党と社会に主席の唯一思想体系を確立するための諸原則を明らかにした。これは、「党の唯一思想体系確立の十大原則」を指していると考えられる。[3]「十大原則」が定めている北朝鮮国民の思考・行動様式を、チュチェ思想の視点から解明したのが、金正日の説く「社会的・政治的生命体論」である。金日成著作集 27 に、「社会的政治的生命論」と同趣旨の論考がある。「わが党のチュチェ思想と共和国政府の対内対外政策のいくつかの問題について―『毎日新聞』記者の質問にたいする回答―（1972 年 9 月 17 日）」で金日成は次のように述べている。

「人間にとって自主性は生命であります・人間が社会的に自主性を失うならば、人間とはいえず動物となんら変わるところがありません。社会的存在である人間にとっては、肉体的生命よりも社会的・政治的生命が大事であるといえます。たとえ命はつながっていても、社会的に見捨てられ、政治的自主性を失うならば、社会的人間としては屍も同然であります。」

この部分は、後述する金正日の社会的政治的生命体論と同趣旨である。「自主性」を失った人間は動物と変わらず、社会的に見捨てられて屍も同然であるとみなされている。この「自主性」という言葉が何を意味するかは、この論考の次の記述から明らかになる。

「民族が自己の運命の主人となるためには、自主的な政権をもたなければならず、政治において確固たる自主性が保たれなければなりません。チュチェ思想が、なによりもまず政治における自主の原則に具現されなければならない理由はここにあります。」

「われわれが帝国主義に反対してたたかうのも、朝鮮民族を帝国主義の従属か

---

[3] 「十大原則」については、黒坂(2015-1) 参照。

ら完全に解放し、自主権をもった民族として自由に暮らすためであります。」
「政治において確固とした自主性を保つためには、自己の指導思想を有し自らの決心にしたがって、もっぱら自国人民の利益と自国の実情にかなうようにすべての政策と路線を決定しなければなりません。」
「チュチェ思想を具現するというのは、自主的立場と創造的立場にたって革命と建設を力強くおし進めていくということを意味します。」
「朝鮮革命にチュチェ思想を具現するうえでもっともさし迫った当面の問題は、祖国の自主的平和的統一を実現することであります。」
金日成によれば民族が自己の運命の主人となるためには、「自主的な」政権を持たねばならない。「自主的な政権」とは、自己の指導思想を有し自らの決心に従ってすべてを決定する政権である。自己の指導思想とは、チュチェ思想である。チュチェ思想に従って朝鮮民族を帝国主義の従属から完全に解放することが、朝鮮民族を、自主権をもった民族にすることなのである。
金正日（2011）「チュチェ思想教養で提起されているいくつかの問題について」は次のように述べている。人民大衆が革命の自主的な主体になるためには、党と首領の領導のもと、一つの思想、一つの組織に結束されねばならない。組織的、思想的に統一団結した人民大衆だけが、自分の運命を自主的、創造的に開拓していくことができる。人民大衆は、党の指導のもと領袖を中心に政治的、思想的に結束することにより、永世する自主的な生命力を持つひとつの社会的政治的生命体をなす。個別の人間の肉体的生命には終わりがあるが、自主的な社会的政治的生命体に結束した人民大衆の生命は永遠である。金日成は歴史上はじめて、個人の肉体的生命と区別される社会政治的があることを明らかにした。社会政治的生命は首領、党、大衆の統一体である。個人の生命の中心が脳髄であるように、社会政治的集団の生命の中心は、集団の最高脳髄である首領である。党は、首領を中心として、組織的、思想的に固く結合した核心部であり、自主的な社会政治的生命体の中枢になっている。個別の人間は、党組織を通して社会政治的生命体の中心である首領と組織的、思想的に結合し、党と運命を共にするとき、永世する社会政治的生命を得られる。首領は社会政治的生命体の最高脳髄であるから、集団の生命を代表しているので首領に対する忠実性と同志愛は絶対的、無条件的になる。人間にとって最も貴重なのは生命である。肉体的生命より、社会政治的生命のほうが貴重である。個人の生命より、社会集団的生命の方が貴重である。主体思想は、肉体的生命の要求を充足させるために生きる生活は動物の生活と変わりないとみなす。首領、党、大衆から離れて孤立的に生きる生活は、人間の社会的本性に反し、価値のない生活である。
「社会的・政治的生命体論」は、「十大原則」で定めている金日成、金正日へ

の隷属を、「首領は社会の脳髄、党は社会の中枢」という生命観から説明した。金正日は首領と党から離れて生きる生活は価値のない生活であると主張している。それならば、金日成、金正日と朝鮮労働党を少しでも批判する人間の生活（生命）は価値がない、という結論が容易に導かれる。「自主的な主体」になるためには、党と領袖の指導のもとに一つの思想と組織に結束されねばならないのだから、党と領袖を少しでも批判する人、団体は自主性を失っていることになる。「社会的政治的生命体」の一員が党と領袖の「教示」「お言葉」に従って何かを実行するとき、外国がそれを妨げたとしよう。その外国は「共和国の自主権」を犯していることになる。「共和国の自主権」については後述する。

3・北朝鮮の憲法、刑法[4]

（3－1）憲法

黒坂(2015-1)は、「十大原則」が北朝鮮社会の全体を規定する、事実上の最高法規になっていることを指摘した。「十大原則」は憲法をはじめとする北朝鮮の全ての法を越えた「掟」であると考えられる。以下、これを前提として北朝鮮の憲法について簡単にふれておこう。憲法の序文の冒頭は次である。

「朝鮮民主主義人民共和国は、偉大なる首領金日成同志と偉大なる領導者金正日同志の思想と領導を具現する主体の社会主義祖国である。」

序文の最後の部分は次である。

「朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民は朝鮮労働党の領導のもと、偉大なる首領金日成同志を共和国の永遠の主席、偉大なる領導者金正日同志を共和国の永遠の国防委員会委員長として高く奉り、金日成同志と金正日同志の思想と業績を擁護固守し、継承発展させ主体革命偉業を最後まで完成させていくだろう。朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法は偉大なる首領金日成同志と偉大なる領導者金正日同志の主体的な国家建設思想と国家建設業績を法化した金日成・金正日憲法である。」

憲法第三条は次である。

「朝鮮民主主義人民共和国は人間中心の世界観であり人民大衆の自主性を実現するための革命思想である主体思想、先軍思想を自らの活動の指導的指針とする。」

憲法第十一条は次である。

「朝鮮民主主義人民共和国は朝鮮労働党の領導のもとですべての活動を行う。」

憲法第十二条は次である。

---

[4] 以下の法律については、朝鮮民主主義人民共和国(2012)による。在日本朝鮮人人権協会・朝鮮大学校朝鮮法研究会編訳(2006)に憲法、刑法と公民登録法は翻訳されている。

「国家は階級路線を堅持し人民民主主義独裁を強化し、内外の敵対分子たちの破壊策動から人民の主権と社会主義制度を固く保衛する。」

憲法第六十七条は「公民は言論、出版、集会、示威と結社の自由を有する。国家は民主主義的政党、社会団体の自由な活動条件を保障する。」と規定しているが、憲法の序文や第三条、第十一条を批判する言論活動を誰かが行おうとすれば、憲法第十二条の「内外の敵対分子」とみなされてしまう可能性が極めて高い。「公民」と「敵対分子」を誰がどのような基準で判断するかはこれだけでは不明であるが、憲法第三条、第十一条を考慮すると朝鮮労働党の該当部署が主体思想にもとづき判断すると考えられる。憲法第三条、第十一条は事実上、朝鮮労働党の最高指導者である金日成、金正日、今日では金正恩の「領導」で北朝鮮の国家機構が運営されると定めている。実際に北朝鮮社会のすべてが金日成、金正日、金正恩の指令通りに完全に動くとは考えられないが、司法機関も含めて朝鮮労働党の「領導」、即ち支配下にあることは国民の言動を大きく規制する。国民が金日成、金正日、金正恩と朝鮮労働党を何らかの件で批判すれば、刑法にふれるからだ。

（3－2）北朝鮮の刑法

北朝鮮の刑法で体制批判者の処遇と関連していると考えられる条項は次である。

（その 1）第六十条　国家転覆陰謀罪
（その 2）第六十八条　民族反逆罪
（その 3）第七十一条　反国家および反民族犯罪に対する隠匿罪
（その 4）第七十二条　反国家および反民族罪に対する不申告罪
（その 5）第七十三条　反国家犯罪に対する放任罪

具体的にどういう行為が「反国家」「民族反逆」の罪を構成するかという規程は刑法には記されていない。これでは司法機関、すなわち下記にある「人民保安機関」または「安全保衛機関」の思い通りに人々が処罰されてしまうことも考えられる。また「労働教化刑」の内容については、刑法には記されていない。「反国家」「反民族」の罪を隠匿・放置したものも労働教化刑に処されるということは、北朝鮮社会では密告を奨励されていることを示唆している。去る 5 月 12 日の朝鮮中央通信「朝鮮中央検察所　国家テロ犯罪者引導を要求」は、共和国刑法第 8 条に「共和国の領域外で共和国に反対したり、共和国公民を侵害した外国人にもこの法を適用する」と規定されていることを述べている。2012 年の刑法ではこれは 68 条になっているから、刑法が改正されている可能性がある。

4・北朝鮮当局と体制批判者や批判団体、国家

以下、北朝鮮の体制を批判した人々に関する、近年の北朝鮮当局の評価を北朝鮮の公式メディアである朝鮮中央通信でみていこう。「反党反革命宗派分子」張成澤については黒坂（2015-2）でふれたのでここでは繰り返さない。最初に、北朝鮮当局の人権論について述べた朝鮮中央通信の記事について述べる。

（4－1）朝鮮中央通信「労働新聞編集局論説『帝国主義の人権攻勢を断固つぶそう』」2007 年 8 月 17 日

この日の朝鮮中央通信によれば、上記の論文が「労働新聞」に掲載された。記事は次のように述べている。今日、帝国主義者は「人権擁護」の看板のもと、他国に対する反動攻勢を強めている。帝国主義者の「人権」攻勢は国と民族の自主的発展を抑制し、世界平和と安全を脅かしている。偉大なる領導者金正日同志は次のように指摘なさった。「人権を壊していく仇敵は、人民の自主権を蹂躙し、「人権擁護」の看板の下で他国の内政に干渉する帝国主義者である」。人権は本質的に人民大衆の自主権である。自主権を生命とする社会的存在としての人間の生き方の権利が人権である。この論文の主な論旨は、北朝鮮の住民が金日成、金正日の「教示」「お言葉」を全て実行することを「自主権」であること、「自主権」を持つ生き方を保障することが人権であるという中身である。

（4－2）朝鮮中央通信に「変質者」「人間の屑」と言われた朴庸坤氏

朝鮮中央通信 2007 年 10 月 20 日「御用ラッパ吹き NHK の醜悪な正体」は、この少し前に NHK で放映された NHK スペシャルの批判である。この番組で、朝鮮大学校で長く教員を務めた朴庸坤氏は 1972 年の金日成の 60 歳の「お祝い」として北朝鮮に送られた朝鮮大学校の学生たちに対し、自分は間違っていた旨述懐した。[5]朴庸坤氏に対し、朝鮮中央通信は次のように述べている。[6]
「放送に出た変質者朴庸坤についていうなら、彼自身が今回吐露したように彼は 70 年代から主体思想を研究すると称し、黄長燁と関係を持っていた。彼は困難な情勢のときに敵の側についた変質者だ。」
「NHK のねつ造劇に出演した朴庸坤のような連中が、黄と同様の人間としての初歩的な良心と義理を捨ててしまった汚らしい人間の屑であることは、繰り返す

---

[5] 朝鮮大学校の学生 200 人が金日成の生誕 60 年の「贈り物」として北朝鮮に贈呈された経緯については、ヤン（2013、pp. 48-49）、朴（2017、pp. 138-139）参照。
[6] 朝鮮中央通信の英文では、Renegade Pak Yong Gon となっている。

までもない。」[7]
朝鮮中央通信によれば、NHK の番組は在日朝鮮人による北朝鮮への帰国事業が日朝政府間の政治的な交渉の結果であり、帰国した在日朝鮮人を政治の犠牲者として報道した。NHK は顔を隠した人物を番組に登場させ、「三池淵号」と「万景峰 92 号」が在日朝鮮人に資金提供をさせるような非合法活動の場になっていることを示した。そうした番組に出て北朝鮮に帰国した学生たちへの思いを語った朴庸坤氏は、北朝鮮当局としては「変質者」「人間の屑」なのである。朝鮮中央通信は朴庸坤氏が黄長燁氏と人間関係を築いていたことも、「人間の屑」と断ずる理由の一つにしていることは注目に値する。
朴庸坤氏は朝鮮大学校社会科学研究所監修の「チュチェ思想叢書」で「チュチェ思想の世界観」「主体的世界観」などを著している。「主体的世界観」の奥付によれば、朴庸坤氏は朝鮮大学校社会科学研究所の所長、在日本朝鮮社会科学者協会の会長である。「朝鮮民主主義人民共和国　教授　博士」とも出ている。「チュチェ思想の世界観」の奥付によれば、朴庸坤氏は朝鮮大学校政治経済学部教授である。しかし、朴（2017、第 7 章）によれば、朴庸坤氏は韓国に亡命した黄長燁氏と親しかったので、朝鮮大学校、在日本朝鮮人総連合会の役職を徐々に解任されていった。2007 年 10 月の NHK スペシャルに朴庸坤氏が出た後、在日本朝鮮人総連合会は下部組織の講演で「民族反逆者　朴庸坤の正体について」と題した文書を配布したと朴（2017、p140）は述べている。朝鮮大学校の教職員たちから、TV 出演をとがめる抗議はがきが連日届いた（朴 2017、p140）。朴庸坤氏は 2007 年 11 月に、金日成勲章、国旗勲章 1 級などの国家受勲と共和国科学院院士、共和国博士、教授の証書を返還しろと朝鮮大学校の教養部の責任幹部に迫られ、返還した（朴 2017、p140）。朴(2017、p126)によれば、黄長燁氏の韓国への亡命後北朝鮮当局は彼の血縁や係累はもちろん、黄長燁氏が属していた主体科学院の関係者を一斉に検束した。その数は主体思想の研究者 2000 人とその家族を含めて 1 万人に達したとあるが、朴庸坤氏がこれらの数字をどうやって入手したかは記載されていない。しかし、上記のように朝鮮中央通信が黄長燁氏と人間関係を保持していたことそれ自体を朴庸坤氏が「人間の屑」と断ずる理由の一つにしていたことを考慮すると、黄長燁氏の係累や知人、職場の同僚も「人間の屑」とみなされ、相応の扱いを受けた可能性は十分にある。
朴庸坤氏は 2001 年に在日本朝鮮人総連合会から訪朝するよう招待状が届いたので 6 年ぶりに訪朝した。平壌では労働党中央の「総連指導部」の某部長が朴庸坤氏に北朝鮮の社会科学者と一緒に主体思想の研究をするよう誘ったが、朴庸坤氏は断った(同書 p131)。この時点では、朴庸坤氏は黄長燁氏と親しかったが、

[7] 朝鮮中央通信の英文では、such guys as Pak are just the same dirty human scum as Hwang bereft of elementary conscience and a sense of obligation となっている。

北朝鮮当局を正面から批判したわけではない。朴庸坤氏に「民族敵対罪」などを適用して労働教化刑などをさせれば、在日本朝鮮人総連合会関係者に様々な影響が出る事を朝鮮労働党は勘案したと考えられる。

（4－3）「共和国の自主権」を侵害している米国、韓国と日本

（4－2）で考察したように、「社会的政治的生命体」の一員が党と領袖の「教示」「お言葉」を実行するとき、それを妨げるあるいは批判する外国は「共和国の自主権」を犯していることになりうる。以下これを北朝鮮当局の最近の公表資料により確認する。

（4－3－1）朝鮮中央通信 2014 年 11 月 22 日「祖国平和統一委員会『人権決議』ねつ造遊びは宣戦布告」

この記事は、南朝鮮の傀儡どもが米国に追随し挑発的な反共和国「人権決議」ねつ造遊びを繰り広げていることはわが制度とわが人民に反対する全面的な沿線布告であると述べている。記事によれば、わが共和国は人民大衆の尊厳と権利を最高に高く保証している真の人権尊重社会であり、「人権問題」などあるわけがない。今日わが共和国は、絶世偉人の崇高な愛と後世への愛情政治により人民の全ての夢と理想が実現された社会主義の桃源郷、人民の地上楽園として万人の羨みと驚嘆を受けている。それほど素晴らしい北朝鮮に人権問題があると主張する米国や韓国、日本に対して、北朝鮮は次の声明を発表した。

（4－3－2）朝鮮中央通信 2014 年 11 月 23 日「朝鮮国防委員会『人権決議』全面拒否・全面排撃」

この記事は、北朝鮮の国防委員会の声明を紹介している。声明は米国とその追随勢力が国連で対北朝鮮「人権決議」をねつ造する妄動をしていると主張し、次のように述べている。
「今のようなことを続けるなら、日本は近くて遠い国という程度でなく我々の面前から永遠になくなる存在になることを肝に銘じなければならない。」[8]
「いったん自主権を擁護するための聖戦が始まれば、それをそのままくらわね

---

[8] 英文では次になっている。Japan should bear in mind that if it continues behaving as now, it will disappear from the world map for good, not just remaining a near yet distant country.

ばならず、朴グネ一味は勿論、日本全体が焦土化され水葬されねばならない。」[9]
　北朝鮮の人権問題を国際社会で取り上げる国は「共和国の自主権」を侵害しているから「焦土化」「水葬」されねばならないということである。「水葬」という習慣は朝鮮半島にあるのだろうか。これは、北朝鮮が日本に連続核攻撃を加えると日本列島全体の海抜が低くなり、海に沈むことを意味しているのだろうが核攻撃が実際に海抜を低くするのかは明らかでない。

（4－3－3）朝鮮中央通信 2016 年 11 月 23 日「朝鮮人権研究協会が国連の『北朝鮮人権決議案』ねつ造は厳重な国家テロ」

この記事によれば、朝鮮人権研究協会は 23 日、国連に送る公開質問状を発表した。公開質問状には次の一文がある。
「自国に反逆し、自分の体制に挑戦するものたちにまで慈悲を与えることが『人権』あるというなら、まずは米国から自分の収容所亜監獄に閉じ込めている数万の収監者を皆解き放たねばならない。」
　これは、北朝鮮当局が自国民が北朝鮮の体制を批判することを許していないことを示している。

（4－3－4）朝鮮中央通信 2017 年 3 月 1 日「共和国公民死亡、VX 使用は荒唐無稽な詭弁、危険な政治的妄動」

この記事は、2 月 13 日のマレーシアで「金チョル」という名前の北朝鮮旅券所有者死亡事件に関する北朝鮮当局の主張である。この記事によれば米国と南朝鮮当局はこの人物が「高い毒性を持つ VX 神経物質」により毒殺されたと述べ、北朝鮮に食ってかかる妄動を弄している。さらにこの記事は次のように述べている。
「万が一、米国と南朝鮮当局が分別を失い、我々の制度を崩壊させるための政治的陰謀策動を引き続きやるなら、我々はやむを得ず国の自主権と尊厳を守るためにより強力な自主的措置をとることになる。米国とその追随勢力は、核強国の戦列に堂々と入って来たわが共和国の戦略的地位を直視し、むやみに軽挙妄動してはならないだろう。」
「金チョル」という人物が金正男氏であることは明らかだ。金正男氏が VX ガスにより死んだと発表したのはマレーシア警察であり、米国、韓国ではない。米

---

[9] 英文では次になっている。Once a sacred war is launched to protect the sovereignty of the DPRK, not only the U. S. but the Park Geun Hye group and Japan will have to be hit hard and sent to the bottom of the sea.

国、韓国は北朝鮮工作員により騙されたベトナム、インドネシア女性が VX ガスを金正男氏に散布した旨述べているだけである。要は、北朝鮮当局はマレーシアの空港で北朝鮮工作員が外国人をそそのかして毒ガスを散布することを、「わが国の自主権」と主張しているのである。

（4－3－5） 朝鮮中央通信 2017 年 3 月 3 日「誰も朝鮮の国防力強化を云々する権利はない」

この記事によれば、同日の「労働新聞」掲載の個人署名論文は次のように述べている。
「共和国の自主権と尊厳に毛の先でも触れるものは、それが誰であろうと、地球上のどこに隠れようと、朝鮮革命武力の報復の火の雨を逃れることはできない。」
この記事は、米国と韓国両政府が北朝鮮による弾道ミサイル開発を批判していることを、「共和国の自主権侵害」と論じている。北朝鮮当局が、金日成、金正日の「教示」「お言葉」を実行することを批判する国家、団体、個人は「共和国の自主権」を侵害していることになる。

5・公表資料の内面化とその経路―体験者の手記より

それでは、北朝鮮の住民は当局公表資料すなわち朝鮮労働党の「理論」「思想」をどのように受け止め、内面化しているのだろうか。この問題については、北朝鮮から脱出してきた方や、在日本朝鮮人総連合会の運動に長年参加してきた方の実体験談が参考になる。以下、これらを紹介して検討する。

（5－1）拉致された韓国人李在根氏の手記

昭和 45 年 4 月 29 日に韓国の北方限界線近くで漁船ごと北朝鮮海軍に拉致された李在根氏の手記、李（2002）から重要な点を紹介する。李在根氏は拉致されてすぐ、北朝鮮当局から「思想改造」教育と尋問を受けたが、普通の韓国人が洗脳されるはずもない。李氏の手記は自分が見聞した北朝鮮社会をそのまま描いていると考えられる。李氏によれば北朝鮮では、労働者が幹部を罵ったり喧嘩を売ることは党中央委員会に反逆したものとみなされる。李氏によれば、幹部と言い争いをして処刑された労働者は威州郡でも数十人に上った（同書 p109）。普通は 2 名、多いときは 5.6 人を並べて立たせ、数十人の射撃兵が一斉に引き金を引く。処刑場に労働者、農民、学生、事務員、隠居している年寄りまで動

員して彼らの目の前で銃殺刑を執行する。1994 年以降も毎年 2，3 名程度は公開処刑が行われたが、死刑囚の大部分は社会主義を誹謗あるいは金日成、金正日を悪く言った人たちだった。李氏は拉致されて約 16 年後に、朝鮮労働党に入党しろという党秘書の指示があったので「党の唯一思想体系確立の十大原則」と労働党規約、「金正日現地指導」を正確かつ体系的に覚えるという学習を始めた。「十大原則」は北朝鮮の住民たちの思考と行動、生き方を日常的に律する最高の規範である。労働党の規約は憲法より上位の明文規範である。工場や企業所では、仕事が終わると「総和」をせねばならない。これは相互批判が原則となっている。「総和」が終わると次は講演会や学習会に参加せねばならない。講演会や学習会は毎日のように開かれる。講師は労働者が聞いていなくても 1 時間半程度は話しまくる。

（5－2）元在日朝鮮人木下公勝氏の手記

昭和 35 年夏に一家 6 人で北朝鮮に渡り、平成 18 年に脱北して日本に戻って来た木下（2016、p42）によれば、公開処刑される人々の罪状や動機は年代によって異なっていた。60 年代から 70 年代は過去の親日・親米・新韓行為が問題視され、政治、思想犯として処刑される人が多かった。80 年代以降は生きるため、食べるために窃盗、密輸、違法薬物取引、人身売買などをした者が処刑された。木下氏は 1960 年代前半に初めて公開処刑を見たが、執行日の三日前から街中で一番人通りの多い場所や、駅前広場にある掲示板に「人民公開裁判」と書かれた白い紙が張り出された。その横には「殺人犯罪者、金元国を人民の名で公開処刑にすることを公示する　年齢 32 歳」と、死刑執行の日時と場所が書いてあった。執行当日に木下氏がその場所に行くと、500 人ほどが集まっていた。裁判長が死刑囚に名前、年齢、職業などを聞き、検事が罪状を読み上げた。続いて陪審員、判事、弁護士らが死刑囚に質問をし、すぐに裁判官が「被告を人民の名において死刑に処する。刑は即時現場で執行する」と述べた。すぐに死刑囚は銃殺された。木下氏の記述より、北朝鮮では死刑囚の裁判は極めて簡素で形式的なものであるらしい。金元国が死刑になることは住民に公示する前にどこかで決まっていた。裁判はそれを追認するだけである。

（5－3）北朝鮮の元軍人たちの手記

韓国軍事問題研究院（2013）は、脱北して韓国に来た軍人たちの証言集である。この本の「付録」「北朝鮮の政治思想教養体系と実態」（イ・ジャンフム著）には、朝鮮労働党がその「理論」「思想」どのように北朝鮮の住民の内面に浸透さ

せているかについて、以下のように説明している。
北朝鮮社会は一つの政治組織網だ。誰でも、9 歳から老いて死ぬまで政治組織生活を強要される。政治組織生活は労働行政組織や軍事組織の生活より重要である。住民と軍人は、政治組織生活を通じて思想を強制され、思考と行動を規制されている。法を知らないでも、生きていけるが首領の指示や党の方針を知らないと生きていけない。北朝鮮の政治思想教養は党の組織をはじめとする政治組織により伝達される。全ての政治組織は、労働党を中心に党の領導と支持を執行する政治共同体である。政治共同体の目的は首領の思想を中心にした党の唯一思想体系と唯一指導体系の構築である。首領の思想で全社会を一色化し、首領の命令と支持により全ての社会が一つのように動くようになっている。
唯一思想体系確立の十大原則が、労働党をはじめとする全ての政治組織の最高目標であり、活動原則である。北朝鮮では全住民が政治組織に加入せねばならない。住民に対する政治思想教養では講演がある。住民に対する講演の文章は労働党宣伝部がつくる。労働党講演は地域別、団体別、あるいは全国的範囲で特別講演として執行される。全住民は自らが所属する団体別に政治学習、生活総和、記述会議など休む間もなく買う種の集まりに苦しめられる。生活総和は住民がそれぞれ所属する組織で一週に一度反省する時間である。全ての機関でその日の仕事が始まる 30 分前に労働新聞の社説と論評を読む買いが開かれる。水曜学習、金曜講演、土曜総括会議がある。
第四章の「首領に対する盲目的忠誠病にかかっている北朝鮮軍隊」（ジャン・セユル著）によれば、朝鮮人民軍は朝鮮労働党の軍隊である。朝鮮人民軍には、党の組織が軍の指揮系統と並行している。全ての軍事命令は、各級部隊の部隊長と政治職員の合意を持って共同声明にならねば効力を持たない。軍隊では部隊長と政治職員、民間では工場長と党の職員のように全ての単位で 2 人の幹部が存在する理由は、金日成に対する忠誠心で競争させ体制維持のためにお互い監視しあい、けん制させあうという目的がある。北朝鮮の軍人たちはこのような環境の中にいるので、軍人たちは金日成・金正日忠誠病にかかっている。しかし、第三章の「北朝鮮が教える米日侵略史」（ファン・ホナム著）によれば、2002 年に師団の軍医所で、ある軍医官が「ねずみも鳥も知らないうちにいなくなる」事件が起きた（同書 p118）。[10]この人は北朝鮮で普及されている反日闘争史を認めないという理由により一晩で政治犯収容所に移送された。

（5－4）在日本朝鮮人総連合会中央本部財政局副局長だった韓光熙氏の手記

---

10 「ねずみも鳥も知らないうちにいなくなる」とは、国家安全保衛部が深夜に住民宅を訪れ直ちに政治犯収容所に連行することを意味する。この表現は北朝鮮社会ではよく用いられている。

韓光熙(2002、第二章)で著者が昭和 36 年 4 月ごろに朝鮮労働党の在日本非公然組織「学習組」に加入させられて以後の思想教育について語っている。韓光熙氏によれば、在日本朝鮮人総連合会のどの組織にも学習組があり、その構成員でなければ幹部になれない。学習組の構成員は殆ど、中央学院という名の幹部養成機関で徹底的な思想教育を受ける。六か月の教育機関が終わった頃には、完全な思想改造ができあがり、頭の中は金日成主義一色になってしまう。そこで学ぶと、他の事が一切見えなくなると韓光熙氏は述べている（同書 p80)。韓光熙（2002、第三章）によれば著者は昭和 53 年 10 月に第四次祖国訪問団の副団長兼総務に抜擢され、「表玄関から」初めて北朝鮮を訪問した。韓光熙氏は平壌到着後、朝鮮労働党総連指導課の招待所で特別教育を受けた。

（5－5）康明道（1998）第七章より

康明道氏は 18 号管理所という政治犯収容所に 2 年弱収容された。朝鮮人民軍大佐だった康氏は、外国人と無断で接触したという理由で政治犯収容所に連行された。収容されるまでの康氏は、熱烈な北朝鮮体制の支持者だった。友人たちと政治の議論をするとき、康氏は地主や資本家、反党分子たちを殺してしまうか、勝手なことができないようにプロレタリア独裁をしなければならないと熱弁をふるっていた。収容所を出た後、康氏は人々の前で話すときには北朝鮮の体制を擁護したが、心の底では「人間中心の主体思想」を嘲笑していた。康氏は、小学校の頃からはためく共和国の旗を仰ぎ、祖国に対する自分なりの誇りと自負心を育んできたが収容所生活によりそれがなくなった。

(5-6)朴庸坤（2017）第 3 章の「金柄植事件」より

朴庸坤（2017）第 3 章によれば、在日本朝鮮人総連合会の第一副議長だった金柄植氏は在日本朝鮮人総連合会の中央組織局、宣伝局を私物化し幹部を引き連れて、各地の総連組織や関連団体を「下部指導」して歩いた。金柄植氏は飯田橋の朝鮮会館会議室に社会科学者協会の人々を集め、金日成の「社会主義経済におけるいくつかの問題点について」の講演をした。講演後、感想を言えというので、朝鮮大学校政経済学部経済学講座長だった朴庸坤氏は「全人民的所有になっても商品形態はなくならないと思う」「私的所有がなくなれば商品はなくなるが、世界貿易がある以上商品形態をとることになる」と述べた。翌日、在日本朝鮮人総連合会の教育局幹部が朝鮮大学校に来て、「君の金柄植第一副議長に対する態度は不遜だ。金柄植に対する観点は韓徳銖に対する観点であり、韓

徳銖に対する観点は金日成に対する観点だという金日成の教示に背いている」と断罪された。朴庸坤氏が勤務していた朝鮮大学校にも、金柄植氏は思想点検という名の内ゲバ的な自己批判活動を強制した。金柄植氏は朝鮮大学校の教職員を叩く方、叩かれる方に二分した。
朴庸坤氏は「叩かれる方」にされ、自己批判書を何度も書き直しさせられた。大学に泊まり込んで「総括」を書いては破られた。朴庸坤氏は金日成の教示に背いたこと、金柄植氏の権威に挑んだことを認め、宗派行動に通じると自己批判した。昭和 47 年 4 月 14 日の夜 12 時に「総括がよくできた。これで終わる」と朴庸坤氏は告げられた。次の批判対象者は、教師の中で一番年長の鄭淵沼氏だった。鄭淵沼氏は「フクロウ部隊」という金柄植氏の部下の青年たちに、凄惨なリンチを受けた。思想点検の「執行官」だった康某は、凄惨なリンチの現場を見させられて震えている朴庸坤氏に「お前が死んだら錨をつけて村山貯水池へ放り込んでやるぞ。痕跡は残らんぞ」とうそぶいた。金柄植氏の言動については、統一朝鮮新聞特集班（1973）が詳述している。

6・朝鮮労働党幹部が心中に保持する意味世界

これまで北朝鮮当局公表資料と、北朝鮮社会、在日本朝鮮人総連合会関係者がつくっている小社会の体験者の手記を検討してきた。そこでは金日成、金正日が絶対の存在とされている。各団体、各地域の朝鮮労働党の幹部は、担当箇所で朝鮮労働党の幹部として強い権限を持っている。その一つが、口答えをした人間に様々な罪状をつけて処刑ないしは政治犯収容所に送る権限である。この権限は、北朝鮮の一般住民の立場から見ると限りなく大きいと考えられる。生きとし生けるものは死にたくないからだ。在日本朝鮮人総連合会が形成している小社会では、在日本朝鮮人総連合会の最高幹部と一般構成員の関係は、北朝鮮の朝鮮労働党幹部と住民の関係に似ている。朴庸坤氏に対する在日本朝鮮人総連合会中央の教育局長の言葉がこれを表している。日本では在日本朝鮮人総連合会の一般構成員が最高幹部を批判しても処刑や政治犯収容所送りにはされないが、凄惨な集団リンチを受ける場合がありうることがわかる。
　北朝鮮の各団体、各地域の朝鮮労働党幹部は自らに口答えしたり、批判する人間を次のようにみなす。自分は朝鮮労働党中央の委任によりこの団体、地域を任されており、自分に反抗する人物は「偉大なる首領」の教示に背く「民族反逆者」「敵対分子」である。彼らは首領、党、大衆から離れて孤立的に生きているので、人間の社会的本性に反し、価値のない生活をしている。「民族反逆者」「敵対分子」は首領に対する絶対性と無条件性に欠けている人間であり、自主性を失っている。自主性を失った人間は動物と何ら変わるところはない。従っ

て「民族反逆者」「敵対分子」は、動物のように扱われて当然である。「民族反逆者」「敵対分子」を糾弾している自分は、首領様に絶対性、無条件性をもって仕えているから自主性を備えた主体型人間である。康明道氏が政治犯収容所に連行される前には自らをこのように把握していた。在日本朝鮮人総連合会でも、最高幹部は自分たちや北朝鮮を批判する一般構成員を「宗派分子」などと把握し様々な迫害を加えるのだろう。朴庸坤氏の実体験がこれを示している。それでは、北朝鮮の一般住民や在日本朝鮮人総連合会の一般構成員の意味世界はどうなっているのだろうか。公開処刑や政治犯収容所送り、凄惨なリンチを見聞している彼らが、心の底から金日成、金正日、金正恩を敬愛しているとは考えにくい。彼らは自分たちを支配している朝鮮労働党幹部や在日本朝鮮人総連合会最高幹部に、様々な不満、批判を抱いているであろうが、報復を恐れて沈黙しているのだろう。北朝鮮社会で生き延びていくためには、内心を隠ぺいし金日成、金正日と金正恩を礼賛し身近な朝鮮労働党幹部の指示に従うしかない。ヤン（2013）は、北朝鮮に帰国後特別に許されて大阪に一時的に戻ることができた兄の哀しみを描いている。突然、予定期間より早く帰国することを命令されても兄は全く驚いておらず、表情も変えなかった。「あの国では『考える』こと自体が無駄だ。思考停止しか生きる術はない」とヤンは述べている。北朝鮮の全住民が「思考停止」状態にあるとは考えられない。彼らは親しい者同士で、盗聴されない場所で本音を語り合っているのだろう。北朝鮮の住民のうち、ハムギョン道のように中朝国境近くに住んでいる人々の中には、金日成、金正日そして金正恩と朝鮮労働党を極めて批判的にみる意味世界を持っている者が少なくないだろう。中国東北部にいる朝鮮族は北朝鮮に財と情報を運んでくるからだ。

朝鮮労働党や在日本朝鮮人総連合会幹部が心中に保有している意味世界は全く変化しないのだろうか。彼らが何かにより、それまでの意味世界に疑問を持ち始め、異なる意味世界を心中に形成するようになれば言動が違ってくるであろう。自分たちが「講演」「学習会」などで住民に普及している世界像や首領の人物像が現実と大きく異なっていることに気づけば、彼らが心中で描いている意味世界は変化していかざるを得ない。例えば、朝鮮労働党の公表資料が礼賛してやまない金正日とその家族が、「苦難の行軍」の時期に「招待所」で贅沢三昧の限りを尽くしていたことを中間幹部が知ったらどうなるだろうか。幹部でも首領に対する絶対性、無条件性を徐々に発揮できなくなっていくだろう。最後には脱北か、金日成、金正日や金正恩に屈従して生きていくかという選択を自分に真剣に突きつけるようになろう。そして自らが「反革命分子」「宗派分子」になることもいとわなくなったら、脱北を模索すると考えられる。勿論、朝鮮労働党最高幹部は、幹部や軍人の思想的動揺が深まれば自分たちの地位が危な

くなることを承知している。
去る5月23日の「朝鮮中央通信」、「思想を譲歩すれば社会主義は勝利できない」によれば、同日の「労働新聞」に個人の名前の論説が掲載された。その論説によれば社会主義は思想をしっかり握っていれば勝利し、思想を失えば滅びることは、歴史により証明された真理である。社会主義守護戦は外部から帝国主義者たちを政治思想的に制圧し、内部的には退廃的な思想文化を革命的な思想文化で掃き捨てる攻撃戦である。
この論説は恐らく、朝鮮労働党の宣伝扇動部が執筆したのであろう。北朝鮮内部で、この論説の徹底的な「学習」「講演」が繰り返しなされるはずだ。在日本朝鮮人総連合会でも、北朝鮮当局公表資料のうち思想に関連するものは、様々な形で学習がなされている。

７・本論のまとめと問題提起

本稿は北朝鮮当局公表資料を、体制批判者をどう扱ってきたかという視点から読み解き、北朝鮮社会の体験者の手記で北朝鮮社会及び在日本朝鮮人総連合会関係者が形成している小社会の現実を確認した。北朝鮮で体制批判者が社会の底辺においやられ、最低の消費水準を余儀なくされるのは、次の考え方が北朝鮮当局公表資料により朝鮮労働党の幹部の心中での意味世界として築かれているからである。在日本朝鮮人総連合会関係者が作っている小社会でも、体制批判者は過酷な迫害を受ける。在日本朝鮮人総連合会の幹部が心中に抱いている意味世界はこうなっていると考えられる。
「偉大なる首領」の教示に背く「民族反逆者」「敵対分子」は、首領、党、大衆から離れて孤立的に生きているので、人間の社会的本性に反し、価値のない生活をしている。「民族反逆者」「敵対分子」は首領に対する絶対性と無条件性に欠けている人間であり、自主性を失っている。自主性を失った人間は動物と何ら変わるところはない。従って「民族反逆者」「敵対分子」は、動物のように扱われて当然である。「偉大なる首領」からこの現場を任されている自分は、「民族反逆者」「敵対分子」「宗派分子」を動物のように扱ってこそ、首領様と朝鮮労働党からの信任と責務を立派に果たしている。
北朝鮮の一般住民や在日本朝鮮人総連合会の一般構成員は、内心を隠ぺいして生きる術を体得していると考えられる。朝鮮労働党の幹部らは、自分たちが「講演」「学習会」などで住民に普及してきた世界像や首領の人物像が現実と大きく異なっていることに気づけば、心中で描いている意味世界を変容させるしかない。脱北か、金日成、金正日、金正恩に屈従して生きるか、二つのうち一つだという選択をいずれ自分の心中に突きつけると考えられる。朝鮮労働党幹部や

在日本朝鮮人総連合会の幹部が抱いている意味世界は、徐々に変化していかざるを得ない。勿論、自らが心中に保持している意味世界が現実と異なっているかどうかという確認をするという思考方式を欠いているなら意味世界は変化しない。
文(2013)(2014)にならい、私も北朝鮮研究のあり方について問題提起をしよう。北朝鮮当局公表資料のうち、「反党反革命分子」や「変質者」など体制批判者について述べたものが、北朝鮮の社会経済にどのような意味を持っているのかを北朝鮮研究者はもっと検討すべきではないか。また、北朝鮮当局作成の非公表資料、例えば「党の唯一思想体系確立の十大原則」を重視すべきではないか。
北朝鮮社会の体験者らによれば、北朝鮮の住民は繰り返し、朝鮮労働党の路線について学校や所属団体で学ばねばならない。「十大原則」は北朝鮮社会では法より優先される絶対的な掟である。これに不満を漏らすと、所属団体を管轄している朝鮮労働党幹部から何らかの報復を受ける。幹部と口喧嘩をすると処刑された例もあるようだ。それが北朝鮮社会全体でそうなっているのなら、北朝鮮の企業管理システムは、朝鮮労働党が全住民を恐怖により抑えつけるシステムの一つでもある。
　一般に、労働者が上司に対して公の場ではいかなる不満も表明できない企業や法人は生産性の向上や技術革新、新製品開発、新販路の開拓等が極めてできにくいから、衰退していかざるを得ない。社長や上司との関係は、自分の処遇を左右しかねないから労働者にとって重要な関心事項である。その企業で「過労死」が続出しているのなら、その企業の管理システムに重大な問題があるはずだ。
北朝鮮の労働者、住民は所属企業や団体で長時間朝鮮労働党の理論、政策について「学習」せざるを得ない。北朝鮮では「労働者は朝鮮労働党が開催する主体思想の学習会、講演会に参加せねばならない」という明文化された契約は存在しない。労使間に契約書がなくても労働者がかなりの労力を「学習」「生活総和」などに配分せざるをえないのなら、使用者側すなわち朝鮮労働党が強力な権限を持っているのだ。北朝鮮社会では、労働時間の制限が事実上存在しない。配給が殆ど与えられず「過労死」してしまう労働者はいるだろうが、私が見た限り北朝鮮当局公表資料には「過労死」は言及されていない。朝鮮労働党の幹部も、相当な労力を地位保全のために費やさねばならないはずだ。幹部にも「過労死」する人は少なくないだろう。
　労働者や住民が金日成、金正日そして金正恩と朝鮮労働党幹部を公然と批判しても何の報復もないなら、彼らが所属企業や団体を管轄する朝鮮労働党幹部の指令を実行する必要はあるまい。体制批判者を処刑ないしは政治犯収容所送りにすることは、近年始まったことではない。これは朴憲永らに対する処刑を

示唆する金日成の著作からも確認できる。[11]北朝鮮の企業管理システムを労働者、住民の視点から見る場合にも、体制批判者、即ち北朝鮮社会における最貧困層の状態を把握すべきである。政治犯収容所に「鼠も鳥も知らないうちに」連行され、当地で「過労死」する労働党幹部や労働者の状態を解明すべきではないか。「過労死」の存在と企業管理システムは無関係だろうか。勿論、この問題を徹底的に検討すると、朝鮮労働党から「朝鮮民族敵対罪」「自主性を失った人間」「変質者」等の批判を蒙る可能性はある。

参考文献

網野善彦（2014）「*中世的世界とは何だろうか*」朝日文庫

内橋克人（1992）「ドキュメント恐慌」現代教養文庫

木下公勝（2016）「*北の喜怒哀楽　45 年間を北朝鮮で暮らして*」（高木書房）

金正日（2011）「チュチェ思想教養で提起されているいくつかの問題について朝鮮労働党中央委員会責任幹部にした談話―1986 年 7 月 15 日」（金正日選集 11、pp. 359- 398 所収、朝鮮労働党出版社）

金日成（1986）「わが党のチュチェ思想と共和国政府の対内外政策のいくつかの問題について―『毎日新聞』貴社の質問にたいする回答　1972 年 9 月 17 日―」（金日成著作集 27、朝鮮・平壌外国文出版社）

黒坂真(2015-1) 「『党の唯一思想体系確立の十大原則』は『二次資料』『関係筋の情報・資料』なのか―文浩一氏による拙稿へのコメントに関して―」『Osaka University of Economics Working Paper Series No. 2014-4』

黒坂真(2015-2)「金日成，金正日と『反党反革命宗派分子』―文浩一氏の問題提起にこたえて―」『Osaka University of Economics Working Paper Series No. 2015-1』

康明道（1998）「*北朝鮮の最高機密*」文春文庫

在日本朝鮮人総連合会編（1995）「*金正日略伝*」（雄山閣）

[11] 黒坂（2015-2）参照。

在日本朝鮮人人権協会・朝鮮大学校朝鮮法研究会編訳(2006)「*朝鮮民主主義人民共和国主要法令集*」日本加除出版株式会社

佐藤勝巳（1978）「*わが体験的朝鮮問題*」東洋経済新報社

玉城素（1996）「*北朝鮮　破局への道　チュチェ型社会主義の病理*」読売新聞社

統一朝鮮新聞特集班（1973）「*『金柄植事件』―その真相と背景*」統一朝鮮新聞社

内藤陽介（1999）「*マオの肖像　毛沢東切手で読み解く現代中国*」雄山閣

文浩一（2013）「北朝鮮の一次資料は信頼できないのだろうか―黒坂真教授の書評への反論―」『Hi-Stat Vox』No. 28, 2013 年 3 月 25 日

文浩一（2014）「北朝鮮当局公表資料の学問的利用の可能性について：　拙著にたいする黒坂真教授の書評へのコメント」『比較経済研究』第 51 巻第 2 号，pp. 43-50

朴庸坤（2017）「*ある朝鮮社会科学者の散策*」現代企画室

盛山和夫（1995）「*制度論の構図*」創文社

盛山和夫（2011）「*社会学とは何か　意味世界への探求*」ミネルヴァ書房

ヤン・ヨンヒ（2013）「*兄　かぞくのくに*」小学館文庫

李在根（2002）「*北朝鮮に拉致された男　30 年間のわが体験記*」河出書房新報社

朝鮮語文献

朝鮮民主主義人民共和国法典（2012）法律出版社、朝鮮出版物輸出入社印刷所、印刷

朝鮮中央通信（本文中に出典を記載）

英語文献

Bowles Samuel and Gintis Herbert, (1990)”Contest Exchange: New Microfoundations for the Political Economy of Capitalism”, *Politics & Society* 18, no.2, pp. 165-222

Gregory, Paul. R. (2001)"*Behind The Façade of Stalin's Command Economy*", edited by Paul R. Gregory, Hoover Institution Press

Williams, Eric,(1944) "*Capitalism & Slavery*", The University of North Carolina Press